

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.2

4歳児の保育の 面白さ



高橋陽子



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」では、子ども・保育者・保護者がつながり、共に生き、共に創り、共に育つことを目指し、本園をめぐる多様なつながりを視点に発信する中で、保育を見つめ直していきます。

シリーズ第2回は、本園に長く勤務する4歳児学級担任が、遊びの中でのモノ・ヒト・コトとのつながりを丁寧にひもとき、子どもを理解すること、遊びの充実を支える保育者のかかわりについて省察します。

保育者として子どもとかわる時間を重ねるほど、保育の中の小さなコトが、とても大切であり、保育者自身も自分だけで子どもと向きあうだけでなく、ヒトとつながることが大切だとあらためて気づかされます。

*

「先生、お山に来て」と、担任している年中女兒に声をかけられ出向いてみると、「よく

いらつしやいました。家をご案内いたします」と急に丁寧な口調になり、「こちらにどうぞ」とお山のあちこちに連れていってくれました。時々男児、女兒が「にゃーにゃー」と甘えてくると、「あつちに行つてなさい」「お姉ちゃん、遊んでやって」と手で追い払うようにもします。私もかしこまって「猫を飼っているのですか？」と問うと、「そうなんです。1匹はいいんですが、もう1匹が言うこと聞かなくて」と言つて、「気にしないでください。次は……」と案内に戻ります。「お山」と本園で呼んでいる場所は、築山、イチヨウヤケヤキの大木、丸太の遊具等があり、あとは程よい広さの雑草園です。それでも彼女の目や頭には、このお山に、玄關、遊び場、お風呂などが見えていたのでしょう。

なりきつて遊んでいても、時々、本人に戻ります。お山に隣接するいずみナーサリー（お茶の水女子大学にある学内者向け託児施設）

お山は、幼稚園と共有の場）に入る10段ほどの階段に積もつた落ち葉を集めたいと、みんなでもミニ熊手を取りに行きました。猫もお母さんもお姉さんも一緒に葉を集め、今度は雪合戦ならぬ「落ち葉合戦」になつていききました。何でもすぐに遊びにしてしまう子どもたちの面白さを感じました。

このように年中組では、役になりきる中で、時に「自分に戻ることもある」ような緩やかなごっこ遊びが繰り返られていきます。そして、友達の状況を感じ、環境を遊びに取り込みながら遊びを共有している姿を見ると、子どもの遊びの世界に教師はどうかわるのか、子どもに任せておいたほうがいいのではないかと感じるがあります。

3学期に入り、投げコマをしている年長児を見て、「先生、コマ、やりたい」と言つてきたことをきっかけに、準備しておいた糸引き

コマを出しました。興味をもつてもすぐには回せるようにならないのが、コマの醍醐味、と私は思っているのですが、あまりにできないと「やーめた」と引き出しにしまわれ、なかなか再挑戦しないこともあります。しかし、今年の年中組の子どもたちはいつもとは違っていました。何度も挑戦し続け、回せる子どもたちがじわじわと増えていきました。1か月以上もの間、登園するとコマ好きの仲間が集まり、コマを回す場を作り出し、対戦したり、その場がごっこ遊びにつながったりしていました。

コマは、色を塗り重ねたり、装飾を付けたりしながら、常に変化していきます。回すと色が変わることに始まり、油性ペン、水性ペン等、ペンの種類によって同じ色でも回すと違う風合いになることや、金、銀の紙を貼ると、色が浮かび上がることなどに子どもたちは次々気づきました。その都度「先生、見に

来て」と声をかけられ、一緒に感動しています。装飾を付けると回しにくくなると感じれば、糸が引つ掛かるから、重くなつたから、と原因を考えます。いろいろな過程を体験して、コマとのかかわりが進化していくのだと、感心することもたくさんあります。私は、一緒に色を塗ったり対戦相手になつたりしながら、「すごいね」「きれいだね」と言うだけになつていると感じることがあります。

2月になって、「先生、色水できました。入れ物ちようだい」と、園庭につながる保育室の扉から声をかけられました。園庭では、暑い夏でも寒い冬でも、色水作りを楽しみ姿が見られます。いつでも興味をもったときに手に取れるようにと、保育室から園庭に出た三和土さんわどの一角にボウル、ざる、透明カップ、漏斗ろうと等を置いています。子ども達の遊びの様子を見ながら、泡立て器、すり鉢、すりこ木等も夕

イミングを計って出してきます。

まだ暑かった夏の日、手洗い用のせっけんを持ち出し、大きなたらいの周りを囲み、洗濯して泡を立てることを楽しみました。子どもたちは泡をカップに移しました。お玉があるとよいかも、と新たに道具を出してきます。

「ソーダです」と子どもが言うのと、いろいろな味になるように、食紅を出してみたりもしました。ある時は、チョークをすり鉢に入れ、水を注ぎ、底にこすって色を出していました。そのうち、砂場のふるいを使って細かい粉を作り出し、それを混ぜたり量を加減したりしながら水に溶いて色水を作り始めることもありました。砂場のふるいを使うアイデアは、その少し前に、湿った木片を削り、かつお節を作っていたことがきっかけだったように思えます。

チョーク以外に何か他の物はないかと思っていたときに、ある研究会に出席した隣の担

任が、クレープ紙もきれいに色が出るという

情報を得てきました。そこで、子どもたちに「これでやってみない？」と投げかけてみました。クレープ紙を数センチ四方に切り、水を張ったボウルに入れると、鮮やかな色があつという間に出てきました。園にあつた6色で作ってみると、そのうち3色のみ色が出る、他のはすりこ木でこすると紙がちぎれて色が出る、そういつたことに気づいていきました。

2日ほどクレープ紙の色水作りが見られましたが、その後は「やりたい」という子どもはいませんでした。その代わり、葉っぱをちぎってきては、すり鉢ですっている子どもたちがいました。さつと色が出てくる色水遊びにも、鮮やかに色が出てくる驚きや、出来上がり色の違いを楽しむ要素は含まれていると思います。力の入れ具合や、水や葉っぱの量を加減することから生まれる、少しずつの色の変化、葉っぱの変化を見ることが、子ども

もの心を動かしているのだろうと考えました。

遊びの中で出合い、手にする物や道具によつて、子どもの体験は違つてきます。子どもが「こうしてみたい」「ああしてみたい」と思つたときに使える物や道具を準備しておいたり、場所や時間を保障したいと願いながら、子どもたちとかがわつていきます。

2月の別の日、「先生、マグネットボード出して」と子どもが言つてきました。このマグネットボードは、四角や丸、三角、半円形など、色も大きさもさまざまなマグネット付きの木製のパーツを大きなボードに張り付け、模様や絵を描いて遊ぶことができます。

2学期のある日、ナーサリーの出入り口からのぞき込んでいた4、5人の子どもたちに気づき、ナーサリーの先生が中に招き入れてくださいました。散歩に出かけている子どもが多かつたこともあり、小さい人は少なめだ

つたようです。幼稚園からお邪魔した子どもたちは、普段目にするのではない遊具に興味津々で、いろいろと触れていました。壁に、長さ14〜15センチくらいの薄い木製の棒が数本、少し斜めに互い違いに打ち付けられていて、そこにおはじきを這わせて転がし、落ちる様子を楽しんでる子どもたちがいました。「もう戻ろう」と声をかけても、なかなかやめようとしません。このようなシンプルな遊びを、年中児もまだまだ楽しむのだと感じ、園での遊びに生かせないかと思いました。

そこから、このマグネットボードのことを思い出したのです。「いつ出そうか」と迷っていたのですが、朝から雨が降り、園庭に遊びに出られない日に子どもたちに声をかけ、試してみることにしました。最初は、手に取つたパーツを張り付けていましたが、そのうち形や模様になっていきました。ある子どもが、8センチくらいの棒状のパーツをつなげ

て坂道を作り、丸いパーツを裏返して転がすことを発見しました。この転がして遊ぶことが広まり、さらに長いコースやナーサリーの壁のような互い違いのコース、棒状以外のパーツも組み合わせた複雑なコースも作り出していきました。集中し、長い時間夢中に取り組む姿に、教師は感心するばかりでした。

子どもたちは遊びの中で、いろいろな人や物や出来事とかかわりあいながら生きています。友達や年長児がしている遊びを見て始めることもありますし、教師である私たちから投げかけることもあります。どの遊びにおいても、かかわりの中で、さらに豊かな発想が生まれたり、戸惑いの中から新たな試行が生まれたりしています。

感嘆するばかりの私ですが、ひとつ心に留めていることがあります。それは、10年ほど前に大学の研究者と一緒に、遊びをビデオに

録り、振り返りを行ったときのことです。ごっこ遊びに興じる男児6、7人のやり取りの場面で、一人ひとりの子どもが、精いっぱい自分の気持ちを言葉や態度で表そうとしている姿に、ビデオの映像を通して出会い直しました。なんとなくわかつているつもりになっていたことや思い違えて捉えていたことがたくさんあったことに気づかされました。この共同研究を通して、自分の保育を省察することの大切さをあらためて確認することにつながりました。

今回取り上げた年中組の遊びに見られるつながりや面白さを受けとめ、園ではいくつものことが編み込まれて生活が営まれていることを忘れずに、夢中になれる時間や物などを保障する大切さをあらためて思いました。